

神話のいきづくヤムナー河畔（その一）

東方学院専任研究員 及川弘美

ヴリンダーヴァンには、クリシユナ神を祀るたくさんの寺院がありますが、クリシユナという名がつく寺院はありません。すべてクリシユナの異称をとって寺院の名前にしています。前回まで述べてきましたラーダラマン寺院も含めほかにも、ラーダーダモダラ、ゴープーナータ、マダンモーハン、ゴヴィインドデヴ、ジヤグキシヨール寺院など、まだまだたくさんあります。これらの異称は、クリシユナ神話の様々なエピソードが描かれているクリシユナ信仰の聖典、バガヴァット・プラーナからとられています。ラーダラマンのラマンという名称も同

様にこの中からとられたものです。そこで今回は、バガヴァット・プラーナの中から、現在ラーダラマン寺院がどのようないわれのある地に建てられているのかお話ししたいと思います。

ヴリンダーヴァンの北辺を東流するヤムナー河岸には、クリシユナ神話にちなんで名付けられたチール・ガート（ガートとは沐浴などのため河に降りるための階段があるところをいいます）、ケーシー・ガートなどが並んでいます。（ケーシー・ガートを過ぎるとヤムナー河はヴリンダーヴァンの東辺を南下しはじめますが、この一〇キロほど下流にクリシユナ誕生の地であ

り、仏教美術でも有名なマトウラーがありま
す。そして、ラーダーラマン寺院は、そのチー
ル・ガートのすぐ南側に位置しています。

バガヴァット・プラーナ第十卷二九章から三
三章には、ヤムナー河の畔で青年のクリシュナ
がゴーピー（牛飼いの女）たちと戯れ、遊んで
いる様子が叙情豊かに描かれています。この中
でクリシュナは、彼を慕うゴーピーたちからラ
マン（愛しい人）と呼ばれ掛けられているのです。
次に、聖典に基づきこのヤムナー河畔でのクリ
シュナとゴーピーたちの情景を簡単に描写して
みたいと思います。なお、この部分については
『バラモン教典・原始仏典』（世界の名著1 中
央公論社）に原点に沿った詳細な訳が載せられ
ています。

満月の美しい夜、クリシュナの甘美な歌に、
すっかり魅了されてしまったゴーピーたちは、

夫のことも子供のことも家のことも忘れて、ヤ
ムナー河畔に集まってきました。ヤムナーの岸
辺には白睡蓮が咲きほころび、心地よくそよぐ
風に揺らぎながらその薫りをあたり一面に漂わ
せていました。ゴーピーたちはクリシュナとと
もに歌い興じて、至福の歎びに浸っておりまし
た。すると突然、クリシュナは姿を消してしま
いました。彼女たちは、クリシュナの居所を探
してヤムナーの岸边に生い茂る種々のマンゴー
の木々、ピヤール樹、パナサ樹、アサナ樹、コ
ーヴィダーラ樹、ジャンブー樹、アルカ樹、ビ
ルヴァ樹、バクラ樹、カダンバ樹そしてニーパ
樹などの木々に尋ねまわり、森から森へと「お
お、主よ、ラマンよ、最愛の人よ、どこにいら
のですか」と叫びながらクリシュナの姿を求め
て駆け巡りました。結局、クリシュナを見つけ
だすことができなかった彼女たちは、再びヤム
ナー河の岸边に戻り、クリシュナを冥想し、彼

を讃えて歌を歌い始めました。やがて、蓮の芳香が風に漂い蜜蜂の群がるヤムナーの岸辺に、クリシュナが戻ってきました。ゴーピーたちは大喜びで彼を迎え取り囲むと、ひとりしかいないはずのクリシュナがそれぞれのゴーピーの間にはいり、クリシュナとゴーピーとが交互に輪になって手をつないで歌と踊りが始まりました。その時、天界の神々もクリシュナを讃え、ガンダルヴァ（天界の楽師）のうちならず太鼓とともに、花の雨を降り注ぎました。

このクリシュナとゴーピーたちが織り成す輪の踊りをラースリーラーといいます。このラースリーラーは、最高神クリシュナとゴーピーたちが合一した至福の世界を具現するものとして、信仰上、非常に神聖な意味を持っています。そのため、この地にラースリーラーとかかわりのあるラマンという名をとって建立された

ラーダーラマン寺院は、ヴリンダーヴァンの重要な寺院の一つとなっているのです。

以上みてきたように、ヤムナー河岸辺のチール・ガートからラーダーラマン寺院のある付近は、バガヴァット・プラナーではクリシュナとゴーピーたちとの戯れやラースリーラーが繰り広げられた花々が咲き乱れる緑豊かな森として描かれています。しかし、現在のヤムナー河岸には、そのような戯れや、美しい河畔の情景を偲ばせるものはありません。それどころか、どこまでも灰色に濁ったヤムナー河の流れと白茶けた砂浜のコントラストは、なにか荒涼としたものすら感じさせます。ただその中で、チール・ガートのそばにある色とりどりのサリーが枝に結び付けられた一本のヴリンダー（めぼうき）の巨木だけが、神話の世界を彷彿とさせています。このチール・ガートについては、また次回にお話したいと思います。